

久野光朗著『会計歳時記』

(同文館 1993) (23) +pp. 437

野 口 昌 良
福 島 吉 春

I. はじめに

著者久野光朗教授は、会計学の分野できわめて精力的に著述活動を続けている研究者である。その研究対象は広範囲におよぶが、とりわけ歴史研究において優れた業績を残しており、1973年には『ギルマン会計学』(1965, 67, 72)によって日本会計研究学会賞(太田賞)を、また1986年には『アメリカ簿記史——アメリカ会計史序説——』(1985)によって日本会計史学会賞を受賞している。

前者はアメリカにおける費用動態論確立者のひとりであるS. ギルマンについての研究と主著(1939)の翻訳であり、後者は、書名にも示されているとおり、アメリカの会計史あるいは簿記史を編年体で叙述した歴史書である。

本書『会計歳時記』は、これまで会計学の歴史研究に心血を注いできた著者の研究成果のひとつである。

なお、本書の一部、107項目は、「会計人のための“一日一史”」と題して、雑誌『企業会計』の1981年の1月号から12月号に掲載されている(序(2))。連載開始当時、366日分のうち約2/3については、すでにメモがあったという(1月号, p. 134)。雑誌連載から本書出版までの13年間の歳月が、このような著書の執筆が一朝一夕には成しえないことを物語っている。

連載記事を大幅に補充し、1年366日の形式にまとめたのが本書である。おそらく、標題に「歳時記」と冠した会計関係の著書は、日本国内はもとより世

界的にも本書が最初であると思われる。

本書の守備範囲はきわめて広く、時間的には釈迦の誕生（BC566頃）から第6回会計史世界会議開催（1992）までのおよそ2,500年間、また空間的には日本をはじめとして英・米・独・仏・伊・露（ソ連・ロシア）などの国々におよんでいる。しかも「簿記・会計に固有な歴史的事項だけでなく、経済・経営をはじめ、文学・哲学・思想などにいたるまで、相当に幅広く各種文献を渉猟し、他の分野からの簿記観や会計観などをも知る」（序(1)）ことができるよう工夫されている。

索引の充実も特筆すべきであろう。事項として883項目、人名・団体名として366項目の索引が巻末に添付され、各事項の相互関連性がたどれるようになっている。

まさに「知的好奇心を満足させ、かつ会計史に関する興味を喚起」（序(1)－(2)）するに充分な一著である。

II. 他の分野から見た簿記・会計

「法律・経済関係の本を読んでいると、『聖書』や文学作品などからの引用があり、それなりに興味を抱かせてくれるが、会計関係の本ではその事例がほとんど見られない」（序(1)）。

序文によれば、本書執筆の動機のひとつに、このような、ある学生の発言にこたえようとする意図があったという。もっとも、著者自身、若いころから古今東西の著名な人物の名言・箴言・教訓などに耳を傾けることが好きで、各種文献から抜き書きをしたり、新聞から切り抜きをしていたというから、その素地はすでにあつたと考えられる。

最初は興味の趣くままに収集したのであるから、その内容は簿記・会計に関連する事項に限られてはいなかったという（序(1)）。しかし、その後、会計学者という専門性から、おのずと収集項目が「簿記・会計」を中心にまとまっていったことは想像にかたくない。

そのような経緯のもとに編まれた本書には、「他分野からの簿記観や会計観」

を紹介する項目が数多くある。この点が本書の特徴のひとつであり、評者にとっても関心のあるところなので、まず、このテーマで書かれた項目をいくつか紹介する。

たとえば、孔子誕生の項（8/27）では、「会計」という言葉が、とくに金銭・財貨の保全管理に関連して、帳簿上の残高（当在高）と実際の残高（実在高）との一致を確認する受託責任の解明手段として理解されていたことを明らかにし（p. 252）、また『赤と黒』（1830）などの作品で知られるフランスの作家 H. B. スタンダール（1/23）をして、この受託責任の解明がとくに複式簿記を通じて行われることを語らしめている（p. 26）。

具体的技術としての簿記・会計ではなく、イメージとしての簿記・会計に関する叙述はさらに豊富であり、なかには、各項目がそれ自体面白いだけでなく、文化的あるいは時代的背景を推測させるがゆえに興味深いものもある。

一例として、フランス人とロシア人の簿記に対する見解の相違を紹介しよう。

著書で紹介されている P. J. プルドン（1/16）や M. E. de. モンテーニュ（9/13）などのフランス人は、簿記に対して一般に高い評価を与えている。プルドンなどは「商業簿記は純理論の最も美事な且つ最も無難な応用の一つである」（p. 19）とまで評価している。これに対して、I. G. エレンブルグ（1/27）や L. N. トルストイ（11/7）などのロシア人は、簿記を醜悪ないしは低俗なものとして捉えている。エレンブルグの作品『雪どけ』（1954）から一節を引用すれば、次のとおりである。「まるで複式簿記だ！活動家の集会で喋っては芸術の思想性を云々し、自分も労働者の姿を描き、それから平然と、誰もがウソをついているのだと公言する。ああ、考えるだにおそろしい！」（p. 30）まさに、諸悪の根源扱いである。

さて最後に、あまりにも有名なゲーテの言葉（3/22）を引用しよう。ゲーテは、自伝的小説『ウィルヘルム・マイスター——修行時代——』（1795）のなかで、親友の商人に次のように語らせている。「またあの複式簿記、あれがどんなに商人に利益を与えてくれたことか！ あれこそ人間の精神が発明した

最も立派な発明のひとつだよ。」(p. 87) この言葉は複式簿記を称えた言葉としてよく知られており、本書でも紹介されているが、著者は、ゲーテがつづいて次のようにウィルヘルムに反論させていることを指摘している。「……君は形式からはじめるんだね。それが内容でもあるように。君たちは、たいていの場合、加え算や決算に気をとられていて、かんじんの人生の総額トータルを忘れてるんだよ。」(p. 87)

以上、他の分野から見た簿記観や会計観を解説した部分の一端を紹介したが、経済・経営のほか、文学・哲学・思想などにあらわれた簿記観・会計観を把握するという作業の背後には、以下のような、会計を社会制度として捉える著者の会計観が存在したことも忘れてはならない。

「会計は、すくなくとも制度会計を前提とするかぎり、時間という歴史的次元と空間という経済社会からなる準拠枠に規定された情報の提供・受領に関する人間サービス制度である」(久野 1993, p. 1)。

「人間用役制度としての会計の歴史もまた、社会経済的背景のもとに、制度史的観点を通じて総合的に考察すべきだと信ずる。」(久野 1985, p. 13)

そこで次に、節を改めて、著者の会計史観を探ってみる。

Ⅲ. 通史の枠組

本書の第2の特色は、主要諸国の歴史的事項をおよそ2,500年という長期に渡って射程に収めている点にある。

それは会計学者としての著者の研究態度と無縁ではない。

主著『アメリカ簿記史』のなかで、著者は、科学史家、中山 茂教授の近代科学発展の枠組を高く評価している——すなわち、中山教授は、西洋における近代科学の発展過程を、時代とともに、その舞台となる国を移動していったものとして捉えているのである。

「(西洋は——評者補注)、バビロニア——古典ギリシャ——ヘレニズム——(インド) ——イスラム圏——西洋中世——ルネサンス・イタリア——17世紀イギリス——18世紀フランス——19世紀ドイツ——20世紀アメリカ、というよ

うにたえず中心を移動させながら現代科学にまで成長してきた科学史発展の主流である。」(中山 1974, pp. 11-12)

E. H. カーによれば、われわれが歴史的認識を高めようとするのは、過去と現在との相互関係を通じて、両者をよりよく理解しようとする意識に基づいており、その歴史的認識の究極の判断規準は、未来に対する長期的な見方に求められるという (Carr 1961, pp. 24, 62, 118)。

つまり歴史とは、過去の諸事件と次第にあらわれてくる長期的な未来の諸問題との間の対話と呼ぶことができるのである (Carr 1961, p. 118)。

かかる観点から、著者は「通史」の意義を強調する。なぜなら、特定の地域、特定の時代における歴史を一般化したところで、その時代が時の流れの一部分であり、その国が世界のなかのひとつの国である限り、十分に意味ある史実を析出することは難しく、また将来に対するヴィジョンを描くことも困難だからである。その意味で、通史こそが歴史に期待されるところにこたえうるのである。

この点、著者の言葉を引用すれば、次のとおりである。

「社会科学の一分野である——すくなくとも一分野たらんとする会計学においても、それが対象とする会計の発展については上記の(中山 茂教授のような——評者補注)大きな枠組のもとで理解することができよう。そして、最終的には、たんなる国別の会計史・時代別の会計史という狭い視点ではなく、世界的な規模において、かつ時代の推移にかかわらしめて、その中心がある国から他の国へと発展してきた世界会計史の潮流を描き出すことが理想である。」

(久野 1985, p. 10)

以上のような主張に基づき、『アメリカ簿記史』が誕生したのであるが、通史という果てしない理想への接近を試みた同書の基盤に、本書に見られるような地域的にも、時代的にも広範囲に渡る事実の収集があったことを知ることができるのである。

IV. 記述スタイルとしての歳時記

本書の基本的特徴の第3は、いうまでもなく、歳時記というそのスタイルにある。著者は「会計人のための“一日一史”」の連載にあたり、その趣旨を次のように述べている。「会計史を専攻する筆者は、就寝前のひととき、桑原武夫編『一日一言——人類の知恵』（岩波書店、1956）や中野好夫編『一日一史』（筑摩書房、1962）などを繙いて、明日への活力を養うようにしています。そして、数年前から、会計の歴史についても同じようなものがあればと考え、暇をみては草案をつくってきました。」（久野 1981, p.134）

歴史をたどり、歳時記を読む人間の心情は、誰もが感じる将来に対する不安あるいは畏怖に由来するのかもしれない。歴史というジャンルに属するか否かは別として、歳時記とか一日一史といったスタイルは歴史的事項を生かすひとつの型であろうし、その価値は人間のもつこうした心情を、日常的レベルに引き直しながら、意識させる点に存在すると考えられる。

もちろん、本書は、一般的な意味でいう歳時記とは異なり、会計という特定の分野を対象にしている。

したがって、読者層はある程度限定されざるをえないだろう。

しかし、本書は会計研究者だけに向けて書かれているわけではない。公認会計士・税理士といった実務家や会計を専攻する学生、ひいては企業の経理担当者など、広い意味で会計に携わっている人々すべて、そして経済学や経営学など、会計学と関連のある社会科学を学ぶ読者すべてを対象にしている。本書を読めば、会計学を少しでも学んだ経験のある人は、いっけん無味乾燥な手続きの集合のように見える簿記・会計が、数々の歴史的人物の興味を引き続けてきたことに驚き、馥郁たる文化の香りを漂わせはじめのを経験するにちがいない。

V. おわりに

以上、久野教授の近著の一端を紹介した。

本来、書評とはその分野に精通している者がなすべき作業であり、その意味で、評者に十分な資格があるかどうか、はなはだ心もとない限りである。まして本書は、著者のこれまでの重厚な研究から産み出されたひとつの成果であり、研究歴の浅い評者ごときが口をはさむべき性質の本ではないことは明らかである。

それにもかかわらず、ここに本書を紹介した理由は、歳時記という特殊なスタイルではあるが、本書には著者の会計（史）観が反映されているのではないかと考えたからである。

したがって、本書評では、できるだけ著者の会計（史）観や他の著書との関係などについても触れるよう心がけた。そのため、いくぶん堅苦しい書評になったが、本書自体は正座して読まなければならないような本ではない。

この点は、著者自身が序文で「ともかく気楽に読みすすむことによって、読者が知的好奇心を充足させ、かつ会計史に関する興味を喚起してもらえることを願っている」（序(1)–(2)）と述べているとおりである。

しかし、たとえ寝転んで、ぼんやりページを繰ったとしても、会計に関心のある読者には、何かしら新しい発見をもたらしてくれる本であることは確かである。

[参 考 文 献]

- 久野光朗稿「会計人のための“一日一史”」『企業会計』(1981, 1月-12月)
- 久野光朗著『アメリカ簿記史——アメリカ会計史序説——』(同文館, 1985)
- 久野光朗稿「会計と時間の概念——『アインシュタインの夢』を読んで——」『緑丘会計人』(緑丘会計人会, 1993, 7) 1ページ。
- 中山 茂著『歴史としての学問』(中央公論社, 1974)
- E. H. Carr, *What is History ?* (London : Macmillan & Co. Ltd., 1961)